

# 國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

国際シンポジウム「日本文化としての宗教：  
海外の授業から」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-07-02 キーワード: 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000539">https://doi.org/10.57529/0002000539</a>

## 国際シンポジウム「日本文化としての宗教—海外の授業から—」

日本文化研究所は、科研費・基盤研究（B）（一般）「日本宗教教育の国際的プラットフォーム構築のための総合的研究」（研究代表者・平藤喜久子 18H00615）主催の国際シンポジウム「日本文化としての宗教—海外の授業から—」を共催した。

この科研費による研究では、海外における日本宗教教育の現状調査を行い、海外の研究者とのディスカッションをもとに、教材を共同開発することを目指す。その開発過程における議論は、日本宗教研究の国際的な発信力を高めることにつながると考えている。また、本研究では、その教材をめぐる国際的なディスカッションを土台として、日本宗教研究のプラットフォームの構築を目的としている。

2018年度は、初年度であり、①海外の大学における日本宗教教育の現状調査、②マルチメディア教材に関するニーズの相互検討が計画された。そこで i) 現在日本宗教に関連して何が教えられており、ii) 学生の関心はどこにあるのか、iii) どういった教材が必要とされているのかを探るため、次のような国際シンポジウムを開催した。

国際シンポジウム「日本文化としての宗教—海外の授業から—」

日時：2018年10月21日（日）13：00～18：00

場所：國學院大學渋谷キャンパス学術メディアセンター棟5階会議室06

発題者：

アラン・カミングス（ロンドン大学 SOAS, UK）

ワリード・ファルーク・イブラヒム（カイロ大学日本研究センター、エジプト）

コメンテーター：

飯嶋秀治（九州大学）

木村敏明（東北大学）

司会：

平藤喜久子（國學院大學）

使用言語：日本語

カミングス氏は、ロンドン大学SOASの東アジア言語文化学科の現状を報告した。学生は500～600人で、イギリスが多いものの、他のヨーロッパ諸国からの留学生も多く、学生のバックグラウンドは多様であるとのことだった。日本語を勉強したい学生の動機はポップカルチャーがほとんどである。

日本宗教については、日本の歴史のなかで



学ばれる。工夫としては、なるべく広い文脈のなかに宗教を置くようにしているとのことであった。たとえば古墳や埴輪から、古代の死をめぐる問題へとといった形である。

宗教への興味は、教会に行く学生がほとんどいないといった現状からも、低くなっているといえ、信仰が生活の基盤にあるという状況が理解しづらいとの話があった。

質疑のなかでは、ポップカルチャーの教材としての利用の問題などが取り上げられた。またラフカディオ・ハーンなど19世紀の日本学関係の資料が教材として使われることはほとんどないという話も印象的であった。

また、君主制をとるイギリスであるからこそ、女王がいるということで日本の天皇制など理解しやすい部分があるという指摘もあった。

学生が多様化していることで、宗教の取り扱いで難しい問題がでてきていることなども述べられた。

次の発表者のイブラヒム・ワリード氏は、専門は比較対照言語学で、語彙と意味論について研究しているが、言葉の背後にある思想に興味を持っており、これまで日本文学の翻訳は、英語やフランス語訳からの訳したものが多かったなかで、直接日本語からのアラビア語訳を手がけるようになったという。

ワリード氏は、これまであまり知られてこ



なかったエジプトの日本学の概略を紹介した。オイルショックがきっかけとなり、カイロ大学に日本語日本文学科が開設され、その後高等教育機関では、カイロ大学を含め6つの大学に日本語専攻が設けられていることなどが述べられた。

カイロ大学で日本学を学ぶ学生のなかで、宗教を勉強したいという学生はほとんどおらず、多くの学生は日本語を学び、仕事に活かしたいという目標をもっているという。宗教

については、文化的な要素として受け止めていると指摘した。その背景には、イスラームの影響力が大きく、宗教について議論する機会がないことがあるだろうという。

しかし、日本語を学ぶなかで、お寺と神社の違いや、お寺は仏教であり、神社は神道であること、結婚式を神社で行い、葬式をお寺で行うこともあること、さらにクリスマスも祝うことなどが説明されるという。

これらは多様性を重視する日本的価値観という文脈のなかで語られる。

こうした日本的価値観を説明していきながら、ワリード氏は、異文化間にある普遍的な価値についても考えさせたいと述べていた。

質疑では、具体的な授業運営の方法や、エジプトの古代宗教がエジプト国内でどう教えられているのか、また日本への留学生にガイダンスとしてどういったことを教えているかといった幅広いテーマが話題になった。

エジプトからのムスリムの留学生も増えているなかで、学生がどのような教育を受けてきたかを知ることは重要な課題であると感じた。

前日には国際研究フォーラムが行われており、引き続き参加した方も多く、アメリカ、ドイツなどの事例も引き合いに出されながらの討議となり、全体的に充実したシンポジウムであった。

(平藤喜久子)